

平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	28K05	氏名	太田 進
研究主題 —副主題—	高校生の英語学習における動機付けと学習到達度の関連 —動機付けのレベルに応じた学習指導の方略—		
派遣先	創価大学教職大学院	担当教官	田村 修一・近藤 茂代
所属校	都立山崎高等学校	校長	山本 正

キーワード：高校生 英語学習 動機付け 学習到達度 学習方略

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

本研究は高校生の英語学習に関する動機付けを研究するものである。

東京都が昨年2月に策定した「東京都教育ビジョン（第3次・一部改定）」にもあるように、生徒一人一人の学ぶ意欲を向上させ、主体的な学びを生み出していくことは大きな教育課題として挙げることができる。この主体的に学ぶ生徒の育成において、生徒の学習動機付けに着目し、研究を行うことは大きな価値があるといえる。

過去の学習動機付けに関する先行研究の中で市川（1995）は教科学習の動機や目的についての結果を、充実、訓練、実用、関係、自尊、報酬の六つの志向に分類した。さらに学習内容の重要性と賞罰の直接性という二つの要因の組み合わせによって構造化してこれを「二要因モデル」と名付けた。

本研究ではこの市川の研究に着目し、高校生の学習動機付け志向と学習到達度との関連を質問紙調査において明らかにし、動機付けのレベルに応じた学習方略を探ることを目的とする。

2 研究の内容・研究の方法

1) 調査対象と調査時期

都立高等学校7校第1学年402名、第2学年836名、第3学年259名、第4学年13名、計1510名を対象に平成28年3月～4月と9月～11月にかけて実施した。

2) 測定具

英語学習における動機付けを調べるために市川（1995）が作成した心理尺度をもとに、修正したものを使用した。全37項目、5件法で回答を求めた。学習到達度に関しては平成28年7月と10月に行われた定期検査におけるコミュニケーション英語の得点を用いた。

3 研究の結果

1) 高校生の英語学習動機付け

都立高等学校A校（1年163名、2年230名、3年228名計621名）に通学する生徒がもつ英語学習動機付けに関する計37項目への回答について、各項目の平均値と標準偏差を求めた。その結果、全37項目の

平均値は2.99、標準偏差は0.65であった。その中で平均得点が高い項目を抽出すると、実用志向が三つ、充実志向が二つ、報酬志向が一つであった。

(Table 1)

2) 学習到達度との関連

A校における学習動機付けが定期検査得点の上位群（M+1/2SD）と下位群（M-1/2SD）とどのように関連しているかを調べるために、全体から得点の上位・下位群を抽出し、各動機付け得点と比較した。その結果、充実3の項目や、報酬5といった項目は上位群・下位群とも共通して高い得点を示した。一方、充実志向「英語の勉強は大切でやりがいがある。」という項目は上位群と下位群に大きな差が見られた。次に試験成績に特に強い影響力を持つ動機付け項目を明らかにするために、二回の定期検査の合計得点を従属変数とし、上位群が高い得点を示した学習動機付け尺度七つの質問項目を説明変数として重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果、重回帰式は0.01%水準で有意となった。（ $F(7, 557)=12.817$, $p<.001$, $R^2=.13$ ）標準偏回帰係数については、「英語の勉強は大切でやりがいがある。」が(.31)であり、試験成績という学習到達度に関して正の影響があるものは一つのみだった。その他の六項目は影響力を示さなかった。

Table1. : 高校生学習者が高い平均得点を示した動機付け項目

	MEAN	SD
充実2 英語がわかったり、できるようになったりすると楽しい。	3.80	1.07
充実3 英語ができる人になりたい。	4.11	1.06
実用2 英語を勉強したことは、実際の生活の中で役に立つ。	3.62	1.08
実用4 英語が必要になってからあわてて勉強したのでは間に合わない。	3.53	1.21
実用6 英語は留学や、多くの国々を旅行するときに役に立つ。	4.13	0.99
報酬5 英語ができると、社会に出てから得ることが多い。	3.88	1.22

3) 各都立高等学校における学習動機付けの比較

各都立高等学校による動機付け項目の平均値の比較を行った。調査した学校のうち、入試偏差値が60以上の学校を上位校、50～59の学校を中堅校、49以下の学校を下位校と定義した。分散分析を用い、成績上位校と中堅校、下位校の動機付け得点の比較を行った。その結果、 $F(3, 1433)=19.827$, $p<0.01$ となり、上位校の動機付けは中堅校、下位校よりも有意に高いことが見られた (Table 2)。

4 研究の考察

結果のまとめと目指す学習方略

今回の調査から高校生は全体的に英語習得への願望や留学などでの有用性などの充実志向、実用志向に関する動機付けが高いことが明らかとなった。また、英語習得への願望は成績にかかわらず強い動機付けがあった。そして英語の学習の重要性とやりがいを実感できるかが学習到達度に大きな影響を及ぼすことも分析の結果から分かった。

この結果を受けて高校生に対する英語学習の重要性とやりがいを喚起するための学習方略について考察をしたい。

市川(2001)は、学習内容自体の重要性が認識されるような動機付けが重要であるとし、具体的な例として習ったことがすぐ役に立つような場面を設定する「統合化」と形のあるものを作り上げていくような学習活動を行う「作品化」、そして学習へのやる気を引き立たせる「自分との競争」を挙げている。

ドルニェイ(2005)は、生徒の学習動機付けを高める学習方略として35の方略を挙げ、その中でも学習活動の単調さを打破し、学習タスクを挑戦的かつ生徒の関心に応じた魅力あるものにすることが重要だとしている。

以上の先行研究から生徒の関心に沿いかつ、極力現実の場面に即したやりがいのある学習タスクを提示し、そこから生じた学習の結果を一つの作品として創造していくことが生徒の学習動機付けを高めていく可能性があると言える。

では、JETであるNTを活用して「統合化」を図り、かつ挑戦的な学習タスクを提供した昨年度のTable 2. 都立高校成績上位校、中堅校、下位校の英語学習動機付けにおける分散分析の結果

学校	平均値	標準偏差	F
上位校	3.47	.62	19.83***
中堅校	3.12	.69	
下位校	2.92	.81	

N=109~454

*** $P<.001$

実践を紹介したい。それは、コミュニケーション英語Ⅲで週4時間のうち1時間を実践的なコミュニケーション能力の向上を目的として授業を編成した。前半はNTに既習事項を踏まえながらワークシートを作成してもらい、身近な話題について会話する能力の育成を目指した。学期に二回、個人またはペアによるプレゼンテーションを行った。

二学期からは、生徒が好む映画の英語版を教材とし、四技能のうちリスニングとスピーキング力の向上を目指した授業を構成した。リスニング活動は会話を完成させる穴埋めからディクテーションまでの活動を行った。スピーキング活動は、リスニング活動で出来上がった会話文を用い、ペアによる音読、ロールプレイまでの活動を行った。学校、生徒の状況やニーズに合わせて時間数や課題の難易度の調整をして広く実践していくことが可能である。

二点目として考えられるのは学習評価の改善である。高校の現場ではこれまで生徒の学習の改善に生かすといった視点での評価はあまりなされていないと見受けられる。そこで教師による肯定的なフィードバックと生徒によるリフレクションを提案したい。

肯定的なフィードバックは、生徒の学習の成果を形あるもの(学習ノートやファイルなどのポートフォリオ、英作文など)にし、それに対して与えるものである。これは学習者に改善点を建設的に熟考し、学習効率を高めるために自分ができることを確認するような効果がある。

生徒によるリフレクションでは、自己評価カードとルーブリックの活用を行う。自己評価は生徒が自ら学習目標を設定し、学習内容を振り返り、また学習改善に生かすことができると言える。ルーブリックは主にパフォーマンス課題を評価するものとして使われているが、英語ではペアワークやプレゼンテーションなど多様な表現活動が行われるので、その実技的側面を考慮しても大切であると言える。

5 今後の展望

本研究は学習到達度に関する調査の対象が特定の学校に限られていたため、今後は対象の学校を増やして検証する必要がある。また、学習方略についても現場での実践研究を通しての更なる改善が必要と考える。今後も着実な実践と研究を重ね、英語学習者の動機付けを高める方略を追究していきたい。

